

掌編小説集

「星に願いを」

(ファイナル・ミッション)



物書き

うときゅういっき



掌編小説集

「星に願いを」

(ファイナル・ミッション)

うときゅういっき

目次

●序

(こども)

●未来からの暗示

●胸騒ぎ（奇妙な朝、あとで再掲）

●ケロヨンの指人形

●青虫

(生き物)

●さくらの置き土産

●蝉（せみ）

●蚊蜻蛉（かとんぼ）

●黒糸とんぼ

●カナカナゼミ

●蛾

(この星)

- 奇妙な朝
- 黒い予兆
- 木造大型客船「地球号」秘話

(生きもののコラボ)

- 冬のひまわり
- 生き物パーク
- 真夜中の秘密会議

(ファイナル・ミッション)

- Final mission 「最期の任務」
- 結
- 著者プロフィール

序

●人間以外に目を向けよ。さすれば星（地球）は瞬（またた）かん。

松尾芭蕉

「静けさや、岩に染み入る、蟬の声」

「荒海や佐渡に横とう、天の川」

「あら尊、青葉若葉の、日の光」

加賀の千代女

「朝顔に、釣瓶採られて、もらい水」

詠み人知らず

「韃靼海峡を、てふてふ（蝶々）が、一羽、渡ってく」

坂本九

「上を向いて、歩こう」

「見上げてごらん、夜の星を」（星に願いを）

本編

(こども)

2017/1/7

未来からの暗示



子供の頃の事です。

夏休み、遊び疲れて帰ってきて、いつの間にか、八畳の間で寝入ってしまったようです。あるいは、お昼寝でもしよう、と思ったのかもしれません。

目が覚めると夕暮れ時でした。日が落ちかけていて、部屋の中は少し薄暗く、かなかな（＝日暮し蟬）が鳴いている以外は、物音ひとつせずにひんやりと静まりかえっていました。母は夕飯の総菜を求めて買い物にでも出かけたのか、おりませんでした。弟や妹たちも、まだ外で遊んでいるのかやはりおりませんし、ばあさんもいつも座っている茶の間にもおりませんでした。

その時、何故かふと、言いしれぬもの悲しさに襲われました。

その頃は、まだ宇宙というような抽象的な言葉は知らなかったと思いますが、その言葉を大人になって使うことが許されるなら、本当に「宇宙にただ独り」のような感じがしたのです。

この先、どこまで行っても、誰にも会えない。誰とも繋がれない。何か知らぬ間に、みんなとの糸が切れて、独り置いてきぼりにされたような、なんとも言えないもの悲しさ、さびしさ、おそろしさ。

僕は急に心細くなって

「ねえ、みんなどこ？どこにいるの？だれもいないの？」

と、大きな声を出しました。しかし返事はどこからも返ってきませんでした。

あれはなんだったのか？何故そうまで、はっきりと覚えているのか？

そして最近、思い当たりました。

あれは、その後の自分の人生に対するぼんやりとした「未来からの暗示」だったのかもしれない、など。

ひとがそうするのか、自分がそうさせてしまうのか、それはわかりませんが、うっすらとではあっても、影のようにつかず離れず付きまとう予感というものは「虫の知らせ」同様、抱いた段階で、ほぼ確定と言えるほど、相当な確率で実現するもののようです。

2017/1/10 原作

2017/1/13(書直し)

2022/10/5 改作改題

胸騒ぎ

第一話 真っ暗



冷たい雨がそぼ降る、ある冬の日の夕方、庭に面した縁側の沓脱石（くつぬぎいし）のそばに、どこから落ちてきたのか、まだ子供のすずめがびしょ濡れになって横たわっていました。

縁側の奥にあるお便所から出てきた小太郎君は、たまたまそれを見つけたのですが、見るとまだ少し羽が動いているようにも見えます。それが、風のせいなのか、自力なのかは分かりません。

しかし、小太郎君は「まだ、生きていたら」とばかり、咄嗟に裸足のままで冷え切った庭に飛び降り、その子すずめを拾い上げました。小太郎君は手のひらの中にかすかなぬくもりを感じました。

「まだ、生きている！」

それで慌てて縁側に面した八畳の間に駆け上がると、ひとまずアラジンの石油ストーブのそばに子すずめを置きました。

その後、ドタドタと廊下を駆けて台所に行き、お母さんに事情を手短に説明してタオルを借りてくると、ずぶ濡れになっている子すずめをなめるだけ驚かさないように、やんわりとくるんで水気をぬぐい取りました。

それから、和菓子の入っていた空箱を持ってきて別の乾いたタオルをその中に敷くと、両の手のひらで包むようにして子すずめをその上に置きました。

その夜、夕ご飯もそうそうに、小太郎君は子すずめの傍にずっと付き添って、様子を見ていました。見ていると子すずめは、時折動くものの、与えたご飯粒も食べないし、水も飲みません。小太郎君は心配になったので、せめて水だけでも、と、考えた挙げ句に割り箸の先に脱脂綿を巻つけて、それに水分を含ませ、子すずめの口元に持って行ったりもしました。

しかし、子すずめにはその力もないようです。

それを見たお母さんが

「小太郎、それは末期の水と言って、ひとが死んだときにするものだよ。お母さんが時々様子を見て上がるから、今日はもう寝なさい」と言いました。

それでもしばらく、小太郎君はその場を離れずにいたのですが、さすがに眠くなったので、後ろ髪を引かれる思いを残しながら、自分の寝床につきました。

翌朝、小太郎君は目が覚めると、顔も洗うための洗面所には向かわず、真っ先に子すずめのところに飛んでいきました。

動いていないので「おい、おい」と言いながら人差し指で子すずめをつつくと、子すずめは、ころん、と上を向きました。小さくて細い両の脚が胴体に引き込まれたように縮こまっていました。よく見ると目にも薄皮がかぶって灰色っぽくなっています。

子すずめは、もう死んでいたのです。

雨上がりの朝日の中、学校に行く前に小太郎君は、庭先に園芸用のスコップで穴を掘って子すずめを埋めてあげました。子すずめの亡骸の上に、土を一盛り、二盛りして居るうちに、子すずめの姿はだんだん見えなくなっていました。

それから、見よう見まねで小さなお墓に向かって手を合わせたのですが、子すずめは霜の降りた土を被されてさぞかし冷たいだろうと思うと、可哀想で、可哀想で、涙がぼろぼろ出てきました。お父さん雀にも、お母さん雀にも、そして「僕」にも看取られないまま死んだ子すずめが哀れでなりませんでした。

その夜、小太郎君は夢を見ました。

夢の中で小太郎君はお墓に入った子すずめになっていました。夢の中でうっすら目を開けると、その上に土がどさっ、どさっ、と被せられ、次第に身体が重くなると同時に視界も効かなくなって、そのうちまっ暗になってしまいました。

まっ暗！何もし！

小太郎君は恐怖の余り飛び起きました。額に汗をびっしょりかいていました。

その頃小太郎君は、おばあちゃんの部屋で、布団を二枚並べて寝ていました。怖くなった小太郎君は、おばあちゃんの寝間着の袖口を掴みました。それに気づいたおばあちゃんが

「どうした？小太郎」

と訊きました。

小太郎はおばあちゃんの寝間着の袖口を更に強くつかみながら訊き返しました。

「ねえ、死んだら何処に行くの？どうなるの？まっ暗なの？」

「さあね。おばあちゃんもまだ死んだことないから分らんよ。でも、生き物はみんな死ぬから、そのうち、みんなに分るよ。今からそんな心配せんで、子供は、はよう寝んさい」

小太郎君は、おばあちゃんの言葉には全然納得がいきませんでした。

そうしてまるで観念でもしたかのように、

「そっか、やっぱり僕もいつか死んじゃうんだ」

とところろ中でつぶやきました。

そうして、改めて潜った布団の中から、恐る恐る暗闇に包まれた部屋の中を見回すと、暗闇とは言え、闇の中にも濃淡があって、その輪郭は何となく分りますし、窓の外の夜空との区別も分ります。

しかし、死んでしまったら、その、闇の濃淡も、窓と空の区別もなくなってしまうのではないか？それこそまっ暗。

いや、まっ暗と感じている自分もないんだから、まっ暗以前のまっ暗。そういうのをなんて言うんだろう。

まず、小太郎君には今ある自分がなくなる、今見ている景色もなくなる、その目もなくなる、なくなるというのもなくなるということがよく呑み込めませんでした。

小太郎君は、それ以上上手く考えられなくなり、だんだん想像がつかなくなっていきました。

そうしてそれを考えれば考えるほど、闇の奥へ、奥へと呑み込まれていき、次第にこの世に引き返してこられなくなるような恐怖を再び感じました。

頭が冴えて眠られなくなった小太郎君は、一晩、まんじりともせず朝を迎えました。

小太郎君は、徐々に朝の薄明かりが増してくる度に、閉ざされた真っ暗な水底から、少しずつほの明かりの指す水面に向かって浮き上がってくるような感触を得ました。しかし、ほの明かりと共に、少しずつ「この世」に戻ってくるのを感じてホッとしながらも、直ぐその後で、何かが追っかけてくるかのように、

「朝がくる。今は毎日、朝がくる。でも死んじゃったら、この朝は来ないんだ。ずーっと、ずーっとまっ暗なまんまなんだ」

と言う思いに囚われました。

「僕もいつかは死んじゃう。でも、死んだらどこへ行くんだろう？死んだらどうなるんだろう？死ぬってどういうことなんだろう」という疑問と恐怖だけだったのです。

小太郎君は、それまでの、生まれてから10年の間に、このように言いようのない不安を覚えたことは未だかつてありませんでした。

それは、お父さんやお母さんに叱られて罰に入れられた時の押し入れの「暗さ」とも違いましたし、授業中、教室内で騒いで、みんなが体育の授業に校庭に出た後も、独り残りで廊下に立たされた時の「ひとりぼっちな感じ」とも違いました。

小太郎君は、それ以降というものの、何をやっても、そうしてそれが上手くいったときほど「でも、どうせいつかは・・・」という説明の付かない不安が必ず、尾を引くかのように残るようになったのです。

小太郎君は今までのように、たとえ上手くいったとしても、完全に最後まで無邪気に喜び切ることがなんとなく出来なくなってしまいました。

その後、小太郎君の耳元にはこの「でも、どうせいつかは・・・」と言うこびとのささやきのような声が、いつの間にか住みついてしまい、時に応じて、大きくなったり小さくなったりはするものの、完全にそのささやきを止めてくれることはなくなったのです。

第二話 曲がり角



小太郎君はチャンバラごっこが大好きでした。しかし、友達はテレビの映画「コンバット」の影響で、トミーガンやシュマイザーガンを使った戦争ごっこが大好きでした。

しかし、小太郎君はみんなと遊んだ後、家に帰ってきてから弟の小次郎君とチャンバラごっこをして遊び直しました。小太郎君は同じくテレビ映画「白馬の剣士」の影響でチャンバラごっこの方がずっと好きだったからです。

なぜ「コンバット」ではなくて「白馬の剣士」だったかという、ひとつには、みんながお年玉や何かでちゃんとした機関銃のおもちゃを買ってもらって持っているのに、小太郎君はお年玉をもらったことがないので、仕方なく家にあった木材の端切れや釘を使って自分で機関銃をこしらえたのですが、とても恰好が悪く、みんなに気後れしてあまり楽しなかったからです。

もう一つの理由は、こちらの方が強かったのですが、豊臣家の残党の若武者がたった二人で、江戸幕府を開いたばかりの徳川家康の家来やその軍門に降った諸藩の家臣群を数多（あまた）相手に、幾多の難関、危機を乗り越えて、それでも「につくき裏切り者」の家康の首を狙いに行くというのがとても格好良く思えたからでした。

それで、友達との遊びから返ってくると、早速小次郎君と庭でチャンバラをはじめ、テレビの画面に倣って（ならって）名乗りを上げたり、刀を合わせて小競り合いしたり、切ったり切られたりして「えいっ」とか「やられたー」とか夕暮れまで遊んでいました。

時には、それが高じて、家族で高尾山に遊びに行ったときに買ってもらった木刀にひもを巻き付け、それを背中に背負い、そのせいで背負えなくなったランドセルを手にとって登校

して「一体おまえは何を考えているんだ。学校にそんな物騒なものをもってくるんじゃない！」と先生に大目玉を食らったこともありました。

あと、小太郎君は野原歩きや里山登り、田んぼのあぜ道歩きが大好きでした。小太郎君はそのあちこちを歩いて、友達と蛙や虫やザリガニを見たり捕まえたりして遊んでいたのです。そんなわけで、学科の中では理科だけが大好きでした。成績は良くないのですが、授業はとても楽しかったのです。

授業と言えば、小太郎君は、普通の学科があまり好きではありませんでした。とにかく机に向かって、教科書と黑板ばかりを見ているのが苦痛だったのです。その点、野山歩きや理科の課外授業は、空の下の広いところに出られて、自由にあちこち駆け回ることが出来るので楽しかったのです。

それと、宿題も好きでした。宿題と言っても、学科の宿題ではなくて、産休で代わりにやってきた臨時教員のおばちゃん先生が始めた「自由帳」の宿題が好きだったのです。

これは、その日のうちに気づいたこと、感じたこと、疑問に思っただけのことなど、何でも好いから書いて持って行くと言う宿題でした。それを先生が見て、一重丸から花丸を赤ペンでつけ、いいものや面白いもの、みんなが知っていると得になるものは、先生が読んで聞かせるというものでした。

小太郎君はこれに夢中になりました。

野山の小動物の観察が始まって、深夜の月の満ち欠けの観察や、とても関心の高かった恐竜の研究など、手当たり次第に自由帳に書いていったのです。

「今日は5ページ書いた」「今日はもっと書いた」と熱中し、学校の勉強などそっちのけでしたので、成績はむしろ悪くなっていきもしたのです。

しかし、当人はそんなことにはいっこうにお構いなしで、学科の授業を除いては、毎日が楽しくて仕方ありませんでした。

ところがある日、小太郎君はお父さんに呼ばれました。小学校が冬休みに入った最初の日曜日の夜でした。

お父さんはクリスマスの日に小太郎君がもらってきた成績表を前にして言いました。

「おまえも、来年は六年生になる。なのに、遊んでばかりいてちっとも勉強に身が入っていない。このままでは良い上の学校に行けない。とにかく今の小学校は田舎でのんきすぎる。刺激がない。だから、冬休みが明けたら、転校しなさい。隣の学区にある、みんな勉強する小学校にだ。越境入学の手続きは済んでいるから。分かったな」

小太郎君は一瞬、ポツカンとしてしまいました。そうしてしばらく経ってから、高いクレーンからつり下げられた家壊し用の大きな鉄球が引くだけ引いたあとで放され、思いっきりたまった加速度を伴ってドッカーンと頭に打ち付けられたような衝撃を感じました。

頭の中が混乱しました。

「なに？なに？なに、それ？」

自由帳がなくなる。友達もいなくなる。野山歩きも出来ない。第一友達にお別れの挨拶もしていないで、突然消える？

そうしてしばらく考えてから、ここに住んでいるのに、他の学校に通う？それってどういうこと？みんなに会ったら、なんて説明するの？変なヤツだと思われるよな。隠し事するうそつきなヤツだって。みんなを捨てたヤツだって。粗末にしたヤツだって。これってはっきり言って裏切り者って言うこと？

しかし、頭が良くて身体のお父さんには何も言えませんでした。

出口を見失った小太郎君は、一瞬にして真っ暗闇に放り込まれたような気がしました。楽しみにしていた、大晦日やお正月の行事もいっぺんに吹っ飛んでしまいました。

お父さんはすでにお風呂に入りに行っていなくなっていました。

「ぼくはっていうことは、小次郎も、っていうことか」

ということは、ふたりでチャンバラも出来なくなるのかとも思いました。

小太郎君は、大きな曲がり角にさしかかったような気がして、曲がり角の向こうに何が待っているのか、想像が付かず、ただただ大きな不安を覚えたのでした。

第三話　ズドン



転校して、教壇の脇にたって挨拶をしてすぐ、小太郎君は言いようのない恐怖に襲われました。

教壇脇から教室を見回して、新しい友達の顔つきを見るやいなや、まるでそれが今までの友達と違うことが一目で分かったからです。

変な言い方ですが、みんなの前に立っている自分の姿が、今までテレビで見ていた「白馬の剣士」に出てくるお百姓さんの小せがれで、つんつるてんの半纏（はんてん）に草履を突っかけて青洩（あおばな）を垂らしているように思え、それが、半ズボンで皮靴を履いた西洋の子供の前に立たされ、ためつ、すがめつ値踏みされているような感じがして、恐れおのいてしまったのです。

それが曲がり角の向こうの最初の景色でした。

多少想像はしていたのですが、実際にそうしてみると、想像を遙かに超えて「辛い」ものを小太郎君は感じたのです。

「どえらいところに来てしまったぞ」

そんな折、転校して一週間経ったある日のホームルームの時間のことでした。先生が教壇の上から

「先週のこの時間に先生は芥川龍之介の「蜘蛛の糸」というお話をしましたね。極悪人のカンダタでしたが、一回だけ蜘蛛を助けたのをお釈迦様が覚えておいでになって、蜘蛛の糸を地獄に垂らして、救おうとなさったのですが、自分の下から地獄の亡者どもが上がってくるのを見て、糸が切れたらまた地獄に墜ちると怖れたカンダタが、自分の下の糸を切ったのをお釈迦様をご覧になって、カンダタの上の糸を切っておしまいになったと言うような話でした。

ところでみなさんは、このお釈迦様のなさったことをどう思いますか？当然だと思ふ人、それはひどいと思ふ人、それぞれに手を上げてくださいね、じゃあ、まず」

小太郎君はたまげてしまいました。

実は小太郎君は前の小学校の同じホームルームの時間に「蜘蛛の糸」の話を聞かされて知っていました。しかし、その時の先生の質問は、カンダタのことをどう思いますか？と言う質問で、その答えは直ぐに思いついたのです。しかし、蜘蛛の糸を切ったのがカンダタではなくてお釈迦様で、それをどう思うかの話など考えたこともありませんでした。

周りを見ると、新しい同級生達が、何のためらいもなく意図も平然とそれぞれの意見に手を上げています。しかも、元気よく。

「レベルが違う。ついて行けない」

そんなわけで、小太郎君は先生の一回目の質問にはテスラあげることが出来ませんでした。

先生は、

「それじゃ、しばらく考えて、もう一度後で挙手を取りますから」

と言って、しばらく間を置きました。

そうして、幾分時間が経った後、また同じ質問をしました。

小太郎君は、どちらに手を上げて良いのかさっぱり分からなかったのも、目立たないようにおそろおそろ両方に手を上げました。

先生は

「それでは、来週は何故そちらに手を挙げたか、皆さんの意見を訊いてみたいと思います。よく考えてきてくださいね。では、今日はこれでおしまいにします」

なんか小太郎君は「生きた心地」がしませんでした。それでホームルームが終わるとぐったりしてしまったのです。

しかし、その日はそれだけでは済みませんでした。

小太郎君は、ぐったりした心に少しでもきれいな空気を入れようと、息を吸いに校庭に出ようとして立ち上がりかけたその時、ひとりの男の子がやってきて言いました。

「君！」と言ったのです。

おまえではなく、名前でもない呼び方をはじめて耳にしたので、ちょっと驚きました。そうしてその後で

「はっきり手を挙げなよ。どっちか、はっきり。どっちつかずじゃ情けないと僕は思う」と言いきると、すたすたと自分の席に戻っていったのです。当然周りに居た人たちにもその話は聞こえていたはずですが。

その少年は、いつも見ている漫画の「おそ松くん」の登場人物の一人になぞらえて級友がつけた「ちび太」というあだ名のこのクラスの学級委員長でした。普段はふざけてばかりいるのですが、アタマが抜群に良くて、自分の意見もはっきり持っている子でした。

小太郎君は、ちび太君が自席に戻った後、恥ずかしさと情けなさで激しく動揺しました。同時に動揺しているのを必死に隠して平静を装いました。

「進学校の級長さんは全然違うんだな。そんなところまで見てるなんて」

おそらくちび太君は転校間もない新人がどんなヤツなのか、ある程度注意を払っていたから、そういうことに目が行ったのかもしれませんが。

しかし、小太郎君にはそんなことを考える余裕は全くありませんでした。

「お主、見たな〜。生かしてはおけぬ」

普段は、のほほんとしている小太郎君でしたが、その時ばかりは、まるで悪人が抱くような気持ちになったのです。

それは、今まで味わったことのない初めての感情でした。小太郎君は、その感情の芽生えに少したじろぎ、それを過ぎると、自分がなんか、だんだんイヤなヤツになっていくような気がして、悲しくもなりました。

たった一週間しか経っていないのに、小太郎君は自分が、とてつもなく遠い世界に来てしまったような気がしました。

「なんか違う。なんかおかしい。なんか僕じゃない」

小太郎君は、ぼんやりとですが、説明しようのない違和感を覚えました。しかし「違和感」などという言葉を知らない小太郎君は、居心地が悪いな位にしか捉えることが出来なかったのです。

小太郎君は、その居心地の悪さよりも「みるみる減っていく自信」のスピードの速さにいささか慌てふためいていて、それどころではなかったのです。

正直言って、小太郎君は、早く家に帰ってこたつに潜って眠ってしまいたいような気分でした。

しかし、そんなときに限って頭が良くて、大きな身体のお父さんが、あの日お風呂から上がってきて、小太郎君に言った言葉を思い出したのです。

「おまえは井の中の蛙大海を知らずだ。井戸の中の蛙はそれがすべての世界だとのぼせ上がっているが、それは外の大きな海を知らないだけの話だという意味だ。大きな海に行って荒波にもまれてこい。そこで何があっても逃げるんじゃないぞ！戦争では、敵の前から逃げ出したら、後ろから味方にズドンと撃たれるんだ。いいか、逃げ出すんじゃないぞ。卑怯者になるな。分かったな」

小太郎君はそれを思い出して、必死にこらえました。「ズドン」という音の響きと「卑怯者」という言葉が、耳元で何回も鳴っていました。

後年、年老いた小太郎君は、このときのことを思い出して、苦手を逃げずに乗り越えると言うことと、その乗り越えた道が、自分に合っている道かどうかと言うことは全然違うことなのに、それを一緒にしてしまったのがいけなかったな。あの「ズドン」は効き過ぎた、と思ったそうです。

時に小太郎11歳。成人の日の祝日、前日のことでした。

第四話 うそ



小太郎君のお父さんの名前は太郎と言います。

小太郎君は太郎の小せがれだから、小太郎、弟の小次郎君は2番目の小せがれだから小次郎と名付けられました。

小太郎君と小次郎君は以前の学校で先生やみんなに、その名を呼ばれるたびに少しイヤな気になり、兄弟でそのことを話し合ったこともありました。

「なんか、いい加減だよな。1番目に出来たから第一小学校、2番目だから第二小学校みたいで。ナンバースクールは仕方ないけど、ナンバー子供はちょっとなあ」

結構しっかり者の小次郎君は、どこで聞き込んできたのか、ナンバースクールという英語を使って不満を述べたりもしました。それを聞いて小太郎君はちょっと驚いたりもしました。

それと、小太郎君は、名前に「小」の字が付いているのもイヤでした。大きなお父さんに對してなんとなく「小者」と見られているような気もするし、なんとなくお父さんの「小物」で持ち物みたいな気がしたからです。

小太郎君は、それを思うと幾分悔しい気がして、心の中でお父さんに「負けたくない」と思うことがしばしばありましたが、弟の小次郎君は、鼻から「どうせかないっこない」と競いあいを諦めているらしく、この件にかんしては全くの脳天気で、対岸の火事とばかりに馬耳東風を決め込んでいました。

同じ子供でも長男と次男ではかなり違います。それは恐らくお父さんの扱いにもよるのかもしれませんが。とにかくことあるごとにお父さんは小太郎君に「長男だから」「跡取りだから」を連発していたのです。「飲み会の鍋の締めはうどん」の代わりに、お話の締めは「長男だから」みたいな感じで、まるでそれがないと宴が閉まらないかのようでした。

小次郎君は「あ、また言ってらあ」で済みましたが、小太郎君は毎回、テレビ映画のミッション・インポッシブルで「おはよう、フェルプス君、ところで今日の」から始まる極秘任務を与えられたかのように、緊張するのを感じました。テレビ映画は面白かったのですが、それが自分の身に起こるとなると良い気持ちはしませんでした。

ある日、朝から寒気がして仕方がなかったのですが、小太郎君は少し無理をして登校しました。

しかし、お昼の給食前になって、頭がぼーっとして、寒気も留まらないので、先生に許してもらって保健室に行くと、はかった体温計が38度5分のあたりを指していました。

「小太郎君、すごい熱よ。用務員さんに言って、自転車で送ってもらえるようお願いするから、直ぐに帰りなさい」

保健室の先生は、小太郎君の身を心配してそう言いました。

小太郎君は、それを聞いて、はたと困ってしまいました。

「大丈夫です。独りで帰れます！」

「何言っているの。途中で遭難したらどうするのよ。遠慮はいらないから送ってもらいなさいね」

実は、小太郎君は、保険の先生の申し出を聞いたときに、すぐさま「ヤバイ！」と思ったのです。

と言うのも、学校に住んでいる住所として届けてある家は、越境入学で所番地をかりているだけで、実際には住んでいなかったからです。それに、その場所がどこなのかうろ覚えでしかないこともありました。

「ばれる！ばれたらヤバイ！」

しかし、そんな説明は口が裂けても言えませんが、小太郎君はいわれるがままにせざるをえませんでした。

これは後々分かった話ですが、この小学校には、そうした子達が結構いて、学校側にとってもそれは「暗黙の了解事項」だったのですが、その頃の小太郎君は、そんなことを知るよしもありませんでした。

一見野放図に見えて、根が真面目な小太郎君は、越境先ではなくて、本当の住まいに帰ったのでは、せっかく「一味で口裏合わせをした」のに間抜けな自分がドジを踏んで越境の嘘がばれてしまい、そのせいで「捜査陣の矛先」が親に向けられるはめになったら迷惑がかかると思って、自分が寝起きしている住まいではなく、うろ覚えの越境先の住所へと案内したのです。

小太郎君はテレビの刑事物が大好きでしたから、頭の中にそんな喩えの言葉が浮かんできたのですが、そんな喩えをして遊んでいる場合ではありませんでした。

早く本当の家に帰りたいのは山々なのですが、まずは越境先の家に案内しないことにはその先に進めません。しかも当然うろ覚えですから、あっちへ案内したりこっちへ誘導したりになります。

「え、君、自分ちもよくわかんないの？なんか隠してない？」

そんなことを、自転車をこいでいる用務員さんが、突如振り向いて、刑事みたいな疑いの目を向けながら言うのではないかと、小太郎君はひやひやして落ち着きませんでした。

それでもやっとその住所の家にたどり着きました。

小太郎君は用務員さんに送ってもらったお礼を言いましたが、その家の中に勝手に入るわけにはいかないので、仕方なく「もう大丈夫ですから」と早々に用務員さんが学校に戻るよう促し、その用務員さんが角を曲がって見えなくなったのを確かめてから、やおら自分の本当の家に向かって歩き出しました。

それにしても本当の家までの道のりはかなり長いものでした。小太郎君は悪寒と関節痛とだるさでふらふらになりながら遠い道を家まで歩いて帰りました。その家は小太郎君の家とは正反対の方角だったので、辛い身体なのに、いつもの二倍の距離を歩かなくてはならなかったのです。

小太郎君は、つめたい風にさらされて歩きながら

「一体僕は何をしているんだろう？なんでこんなことしてるんだろう？なんでこんなことをするようなことになっちゃったんだろう？」

と、しばらく前から自分の身に起き始めている「今までとは全然違う」出来事の数々が飲み込めなくて、何度も何度も自分に問いかけました。

ですが、小太郎君は家に戻ってもなぜか越境先の家に行ったこととその疑問のことは親には言いませんでした。ただ風邪をひいて熱が出たから早退してきたとだけ言いました。

前の小学校の友達を裏切り、保健室の先生に嘘をつき、用務員さんにも嘘をついてしまった。なんか自分がだんだん「いやな人間」になっていっている気がしました。そんな風になっている自分のことを親が知ったらさぞかし自分のことを嫌うだろうと怖れて言えなかったのかもしれませんが。

発熱による身体の辛さより、遙かにそのことの方が小太郎君にはこたえました。

「え？それ本当？うそじゃないの？」

あのこびとの囁きが、この前とは違った言葉になって、何かをするたびに耳元でするようになりました。

ちびた君のグサリ、お父さんのズドン、そうして今日のうそ。

それやこれやが積み重なっていたようです。次第に小太郎君は、自信はおろか、自分のことが少しずつ嫌いになり始めていました。そうして、この日以来、丸顔童顔の小太郎君の顔から、屈託のない明るい笑顔が次第に消えていったのでした。

第五話　どんでん返し



小太郎君には、大人になったらなりたいものがありました。

それは、考古学者でした。

大空の下での野山歩きが好きで、土を掘りくり返すのも好き。調べ物が好きで、推理を重ねて真相にたどり着く判じ物としての刑事ドラマも好き。

他にも、旅行家だとか南米の移民だとかシルクロードの探検家も、なりたものの候補に挙がっていたのですが、それらはあまりにも大まかすぎてとらえどころがないような気がして、間違いなく土を掘った経験から想像することが出来る考古学者に的を絞ったのです。

もう一つの理由は、他の夢がただただ歩き回ったり、動き回ったりするのに対して、考古学者は観察したり、想像したり、こうではないかと仮の答えを出したりする、えも言われぬ楽しいオマケがくっついていていたからでした。

前の学校での自由帳は、知らず知らずのうちに、その夢を更に具体的なものにするのにとても役立っていました。それで小太郎君は自由帳の宿題が大好きだったのかもしれませんが。

ところが図らずも越境入学する羽目になって以来、その夢がいつの間にか見えなくなっていました。いや、そんな夢を持っていたことすら忘れてしまっていたのです。それほど、新しい学校での生活は、それまでの生活から激変していたのです。

夢に代わって現れたのが、どっちつかず、だの、卑怯者だの、うそつきだの「ありがたい名前たち」でした。

気分転換に野山歩きをしたくても、新しい学校は街の真ん中であって、野山がなく、ならば家の近くで、と思うと、家の周りの野山で「捨ててきた友達」とあって「裏切り者」と言われるのが恐くて、それも出来ませんでした。

なんだか、小太郎君は自分がテレビの中で見た、とうまる駕籠で市中を引き回される罪人か表通りを、大手を振って歩けない日陰者にでもなったような気がしました。

「なんでこんなことになったんだ。なんでこんなイヤな思いをしなくちゃならないんだ」

小太郎君はだんだん腹が立ってきました。その時、お父さんの顔が浮かびました。

「お父さんが悪いんだ。転校なんかさせて」

しかし、その直ぐ後には

「逃げたらズドンだぞ。いいか、卑怯者になるな」

と言う言葉が、その怒りを骨抜きにするかのようによみがえってきました。

小太郎君は、苦しくなりました。

考古学者にはなりたいたいけれど、卑怯者にはなりたくない。でも、卑怯者にならないために、考古学者を諦めるのもイヤだ。

小太郎君の頭の中では、お互い相反する考えがぐるぐる回って、どうしたら良いのか分からなくなってきました。

そんなとき、突然あのこびとの囁きが聞こえてきました。

「いずれはみんな死ぬんだ。おまえもだ」

小太郎君は、ぞっとして脂汗が流れてくるのを感じました。

いずれ死ぬのに、したいこともしないで、大通りから外れて、こんなへんな脇道に逸れていて良いのか？

「イヤだ。こんな思いのまま死ぬのはイヤだ！」

言葉にすれば、そんな文言でしたが、実際には小太郎君はそんなキチンとした言葉を思いついたのではなく、ただ闇雲に、何かに対して突っかかっていきたい気持ちと同時に、それをしないでいる自分自身に対してとてつもなく腹が立っていたのです。

その夜、転校して既に2ヶ月が経ち、六年生への進級が間近になっているというのに、いっこうに勉強がはかどっていない小太郎君に業を煮やしたお父さんが、小太郎君を自室に呼んでこう言いました。

「四月から六年生になる。その一年後には中学生だ。公立ながらこの辺の秀才が集まる学校で、勉強も大変になる。このまま行ったら、おまえはその中で、間違いなく沈没してしまう。そうならないために、来週から塾に行け。隣町の進学塾だ。分かったな」

いつものことなら、頭が良くて身体も大きいお父さんが言うことに間違いがあるなどと疑ったことがない小太郎君でしたが、昼間のこびとの囁きのせいかな、この日の小太郎君は少し違っていました。

「イヤだ！行きたくない！」

小太郎君は思いきって言いました。

言ったあと、興奮と恐怖で、握りしめた拳がガタガタ震えました。

「なんとやった？今、お父さんになんとやったんだ！！」

小太郎君は、心臓がのどの奥から飛び出しそうになりました。しかし、それでもまるで何かに憑かれたかのように、そう、こびとの囁きを振るい払うかのようにして

「イヤだ！イヤだ！絶対に行かない！学校が終わった後で、またその上に別のところで黒板と教科書を黙って座って見ているなんて、もうイヤだ、そんなの！」と、泣き叫びました。

いつも冷静で、微動だにしないお父さんが、珍しくその勢いに押されて、少したじろぎました。

脇でお母さんが

「小太郎、お父さんになんていうことを言うの！謝りなさい！」

と、ややきつく、言いました。お母さんはいつも大抵お父さんの味方をしていたからです。

お父さんは、しばらく黙っていましたが、少し、息を抜くと

「小太郎、お父さんはおまえの将来のためを思って言っている。おまえにはまだ分からんだろうが、世の中というのは大変なところだ。そこを生き抜いていくためには武器がいる。良い学校に行くのは、その優秀な武器を手に入れるためだ。それを理解しろ」

そう言われると、それこそ小太郎君にはそれに反論するだけの「優秀な武器」に見合う理屈の持ち合わせがありませんでした。

小太郎君は、その武器を持ち合わせていないくやしさと自分の胸をかきむしりたいような思いでいっぱいでしたが、もうそれ以上は何も言えなくなっていました。

ところがお父さんは、何を思ったのか突然

「おまえは将来一体何になりたいんだ？なりたいものがあるのか？」

と訊きました。

小太郎君は、一瞬ためらいましたが、どうせここまで言ったんだから、後は野となれ山となれ、馬鹿にされたっていいさ、と思いながら

「考古学者になりたいです」

と、ぽつりと静かに言いました。

当然突っ込まれると思っていたのですが、案に違いお父さんは、小太郎君を馬鹿にするようなことは言いませんでした。そうしてしばらく黙って考えるそぶりを見せてから

「進学塾は行かなくていい。その代わり英会話塾に行け。英語を勉強しろ。それなら良いか？」と全く思いがけないことを言いました。

「英会話？」

小太郎君にはお父さんが考えていることが全く分かりませんでした。しかし、小太郎君は、今まで考えもしなかった「英会話」というものに、何故か少しだけ興味をひかれたのです。

小太郎君は当然「歩み寄り」などと言う言葉をまだ知りませんでしたが、お父さんが譲ったぶん、自分も少し譲らないと行けないかなと思い、

「はい」

と素直にこたえました。

脇でお母さんが少しホッとした様子を見せました。そのお母さんにお父さんは「腹が減った。小太郎もだろう。飯の用意をしてくれ。あと、明日、本屋に行って英語の辞書を買ってきてやれ。辞書名と出版社名は後で俺がおまえに書いて渡すから」と言いました。そして

「小太郎、これからは世界が相手だ。貿易にしろ、学問にしろ、だ。英語はそのために是非必要な武器だ。考古学者が英語を喋れんで、どうする。発掘先が日本だけとは限らんだろう？むしろ世界の大陸が舞台だ」

と言いました。

小太郎君は、今度は力強く

「はい！」

と大きな声で返事をしました。

小太郎君は、昼間とは打って変わってところが少しわくわくするのを感じました。そうして、自分のおもっていることは、恐くてもちゃんとやった方が良いのだなとも思いました。そのあと、小太郎君はテレビで時代物を見ました。薩摩藩士、中村半次郎を主人公にしたものでした。

その中で、主人公が、引用なのか自分の言葉なのかはわかりませんでしたが、「我が胸の、燃ゆる思いに比ぶれば、煙は薄し桜島山」と言ったのが、語呂が良いせいもあってか、妙に耳に残りました。英会話、世界の大陸、燃ゆる思い。

いつも間にか、どっちつかず、卑怯者、うそつきと言う言葉が、小太郎君の頭の中で「オセロゲームの最後の一手」が効いたどんでん返しのように、その三つの言葉に置き換わっていました。

小太郎君は、早く明日になって、お母さんが英語の辞書を買って来てくれないかなと思いました。

そして五十八年後（小太郎のブログより）

2021/11/9-2

最終話 奇妙な朝



墓地公園を抜けて帰宅する折に、石畳を打ち付けるほど盛んに降る雨の中で、豪勢な水量の噴水が立ち上っておりました。

「こんなに激しい雨が降って周りに水量は溢れているのに、なんで洪水の川に放水する様な噴水を止めないんだろう？」

その先を進んで、水抜きされた池の周りにぐるり巡らされた遊歩道を歩いていると、まだ子供で羽毛がぬけかわっていないのでしょうか、体全体が淡い灰色をした鷺（さぎ）が一羽、すくっ、とした姿で立っておりました。

仲間はいないし、白い羽毛の親鳥もいません。

足下の泥中の餌を捕るでもなく、歩くでもなく、ただ立っている。

「何が目的で身動き一つせず、この激しい雨の中で独り、只々ひたすら立っているの？」

その先をさらに進んで、墓地公園を抜け、畑に出ると今度は、いつもはそんなことをして居ない多くの鳩たちが畑の中にあるのでしょうか、餌になる何かを盛んにつついていきます。

「よりによって前方が霞む位のこの激しい雨のこんな日に、なんで？」

何かよくわからないことだらけの奇妙な朝でした。

今朝は物と人間以外の生き物たちでしたが、

「自分も端（はた）から見ると、こんな風に奇妙に映って居るのかもしれないぞ」

ふとそんな疑念がわきました。

やっている本人はそれなりの意図があって大真面目。しかしそこだけを周りから見ると意味不明な謎の行動。

いや謎の行動どころか「無駄かむしろ逆効果」な振る舞い。馬鹿げているようにしか見えない。

「自分の想いと人の評価というものは、いつもこんなものかもしれないぞ」

ヤギさんが相手に喜んでもらえると信じて疑わずに差し出している最高の餌である紙が、狩りを仕立ての新鮮な生肉が食べたいライオンさんには意味不明の申し出にしか映っていないような行き違いばかりなのかもしれない。

そう思うと、

ボタンの掛け違いが怖いような、独り合点による勘違いが恥ずかしいような、そのはき違いを犯さずにいられるのは、針の穴を射通す程難しい業である事が途方もないような。

お互いに異なる姿の相手を思い浮かべながら求める人を必死に探しているような様な位相違いの隔たり。

この先、もし位相が合ったとしても、その上で道が交わる地点に迄たどり着けるのかどうかさえわからない、

雨が霧状に飛び散る今朝の豪雨をさらに一段と濃くしたような視界不良。

その絵姿を眼前に想像すると、

どちらが沖合方向で、どちらが辿り着きたい、自分が目指す陸地方向なのかが見えない、一つ間違うと取り返しのつかない事になりかねない焦りと困惑からでしょうか、

何か言い知れぬ不安とそれを解消できなかった場合に生起するであろう事態への胸騒ぎに徐々に覆われていくのを止めることができませんでした。

ケロヨンの指人形



しんのすけ君はおとうさんの大きな手につかまってホームで電車を待っていました。すると、ホームの後方にあるベンチ方から声が掛かって

「旦那さん、可愛い坊ちゃんだね。坊ちゃんにこれあげてもいいかい？」

とその声は言い、振り向くとひげ面で頭にタオルの鉢巻きをして、泥だらけの汚い服を着たおじさんがベンチに腰掛けたまま、ケロヨンの人形を、人差し指に挿した姿で見せました。

それから、暫く間があった後で、しんのすけ君のかなり上の方でおとうさんの声がして

「ありがとうございます。戴いてもいいんですか？」

と聞こえた後、その汚い格好をしたおじさんが、しんのすけ君に目を向けて、ケロヨンの指人形を差し出してきました。

「坊ちゃん、これやるよ。拾ったヤツで汚いけど」

しんのすけ君はそう言われて、思わず後ずさりをしておとうさんの後ろに隠れてしまいました。

本当は、ケロヨンの指人形は大好きで、とても欲しかったのですが、それ以上に何となく怖かったのです、汚い格好をして、昼間なのに目がとろんとしたおじさんが。それに、日頃おかあさんからは、知らないひとに声をかけられても返事をしちゃダメよ！ついていってもダメよ！すぐ逃げなさい！と言われてもいましたし。

それで、おとうさんの後ろでもぞもぞしていると、おとうさんがまた上の方から

「しんのすけ、人様にものを戴いた時は、なんて言うんだ？ん？ちゃんとありがとうといいなさい」

しんのすけ君は、混乱してしまいました。おかあさんはダメだと言っていた。おとうさんは、ありがとうと言いなさいといっている。そして、自分は、何となくこのおじさんが怖い。でもケロヨン欲しい。

それやこれや、あれこれ思っていると、またまた上の方からおとうさんの声がして「済みません。しつけが行き届かなくて。息子に替わってお礼を申し上げます。恥ずかしがっているだけで、とても喜んでいてと思いますよ。ありがとうございました」

その後、程なくして電車がホームに入ってきて、しんのすけ君はお父さんと一緒に電車に乗り込みました。

汚い格好をしたおじさんは、電車には乗ってきませんでした。それを見て、しんのすけ君少しホッとしました。その後一緒に乗ってきて、話しかけられてもなんと返事をしているのか分らなかったからです。

おとうさんの用事が済んで、家に帰ってきたしんのすけ君は、いつもお母さんから言われているように、まず洗面所で手うがいをしたのですが、その時、泥で汚れたケロヨンの指人形をポケットの中から取りだして、ケロヨンと一緒に洗ってあげました。

そして、その人形を持って自分の勉強机の上に置きました。

しんのすけ君は椅子に座ってケロヨンの指人形を眺めながら、先ほどのことを思い返していました。

お父さんとお母さんの言っていることが違う。それに怖いのと欲しいのと。こんな風に違うのがいっぺんにやってきたときには、どうすればいいんだろう？

しんのすけ君は自分なりに、そこまでは問題を今一度まとめ直してみたのですが、答えは見つかりませんでした。

もし、また同じようなことが起きたら？その時また、今日みたいに、おとうさんの後ろに隠れたまま、お父さんがおじさんとの話を早く終わらないかと、ただ待っているばかりでいるのは、とても嫌な気がしました。それで、なんとか答えを見つけようと頑張ってみたのですが、やはり答えは見つかりませんでした。

しんのすけ君は、やや癇癪持ちの子供でした。ですが、癇癪を起こすと周りに当たるのではなく、何故か自分の手を噛んだり、自分の頭をゴンゴン叩いたり、自分で自分をいじめる変な癖がありました。

それで、答えの見つからないしんのすけ君は、イライラして自分の二の腕にがぶりと噛みつきました。口を離すと、二の腕に歯形がくっきりとついていました。うっすらと血もにじんでいます。

それでも、答えが見つからないしんのすけ君は、机に突っ伏したのですが、疲れていたせいもあって、そのまま寝入ってしまいました。

2020/12/29（加筆）

青虫



けん太君の叔父さんは、交通事故で目の中に入れても痛くないほどかわいがっていた末っ子の庄ちゃんを亡くしていました。それは自分が商売をしているお店の真ん前で起こったのです。

お店の真ん前で起きたことに、叔父さんは「商売にかまけて、どうして見ていてやれなかったんだ」と自分自身を責めさいなみました。

そうして叔父さんは自暴自棄になって、酒浸りになっては荒れ狂い、それが過ぎると今度は青菜に塩のごとくに意気消沈して、ふぬけのような状態になってしまったのです。

そのように叔父さんは、一時、家族の者も手のつけられない状態でしたが、たまたま近くに住んでおられるお坊さまのお話をお聞きしてからというもの、なにやら大いに感ずるところがあったようで、その後再び、あれほど「信ちゃんの命を奪うきっかけになった」と忌み嫌っていたお店の商売に励むようになりました。

その叔父さんが、けん太君に常々言っていたのは
「庄五の命もけん太の命も叔父さんにとっては同じように大切なんだ。我が子、ひとの子の差はないんだ。生き物の命もみんな同じなんだぞ。人間の命が大切で、虫けらの命が粗末だということはないんだよ。だから、決して無益な殺生（せっしょう）をしてはいけないよ。蚊でも蟻でも成る丈、踏みつぶしたりしないようにしなよね」
ということでした。けん太君には「せっしょう」という言葉の意味は分かりませんでした。が、恐らく踏みつぶすことなのだろうとけん太君なりに解き下しました。

そんなある日、けん太君が独り団地の公園のお砂場で砂遊びをしていた時、荷台の配達かごに野菜を積んだ八百屋さんの実用自転車がそばに留まりました。御用聞きのお兄さんが、公衆便所にでも行くのか、とめていったのです。

その自転車をけん太君は見るともなく見ていると、ちいさな青虫が一匹、止めた自転車の後輪のスタンドを伝ってスポークの部分からタイヤの部分に移ろうとしているのが目に入りました。

瞬間、けん太君は、あのお兄さんが戻ってきて自転車をこぎ出したら、青虫は死んじゃう！と思いました。

しかし、けん太君は青虫に限らず、毛虫が大嫌いでした。見ただけで寒気がしてくるのです。

ですが、このままだと青虫はぺちゃんこになってしまうか、細切れになってしまう。「どうしよう？」

実は、けん太君の耳には、青虫を見た瞬間から叔父さんのしてくれた話が聞こえていたのです。

気持ち悪くてしかたない。でも、見たのに見てないふりをしたら？知っているのに、知らん顔したら？

けん太君は手のひらの内側が汗だらけになるのを感じました。心臓もどつくん、どつくんなっています。息が詰まりそうになりました。

すると、その時、わーっと言う大声と共にけん太君は、一気に、青虫を親指と人差し指でつまみ上げるやいなや、思いっきり遠くに放り投げたのです。

けん太君は、その後まるで、50メートルダッシュを10本遣った後みたいに、はあはあと肩で息をすると、その場にへたり込んでしまいました。

手の中には、ぷよぷよの青虫の身体の感触が残っていました。

けん太君は、その感触を思い出すと、体中に鳥肌が立つのを感じ、その記憶をふりはらおうと、思わず頭を激しく振って

「あわわわわっ」

と、叫んでしまいました。

その後、夕日を背に、けん太君は家に帰りました。しかし、けん太君はその日の出来事を家の人には話ませんでした。

夕飯の後、けん太君はひとりでお風呂に入っているとき、さっきのことを何度となく思い出しましたが、起こったことやしたことが今ひとつ自分でもよくわかりませんでした。

しかしその夜、けん太君は、お風呂から上がってから、何かとても言いしれぬ安堵感を覚えて、吸い込まれるように眠りに落ちました。

翌朝、けん太君は目をさますと、起こしに来たお母さんが

「けん太、おまえ夕べ盛んに、やったあ、できたあ、って何回も寝言言っていたけれど、一体何が出来たんだい？」

とけん太君に尋ねました。

けん太君は、お母さんの質問を聞いて、自分がそんな寝言を言ったことが、少し恥ずかしく思えたので、

「どんな夢かなんて、覚えてっこないよ」

と、ごまかしてしまいました。

しかし、お母さんが、台所に朝ご飯の支度をしに子供部屋を出た後、けん太君は、ちょっとにんまりしました。

それというのも、それまで絶対にダメだと思って逃げてばかりいた大の嫌いな毛虫をつかむ勇氣を持てたできたことが、溜まらなく嬉しかったからでした。誰かに褒められたりはしなかったけれど、得意なことをしてお父さんやお母さん、学校の先生に褒められたときよりも、ずっとずっと嬉しかったのです。

その後、小学校の高学年になったけん太君は「苦手の克服」という言葉を知りました。

しかし、あのときのことを思い出すと、あれは苦手の克服なんて言うもんじゃなくて、とっさに「決死隊員」にならなきゃ、とおもっちゃったからだったのかもしれないなあ、と、何故か立派すぎるように感じられたその言葉を、こっそり心の中で書き直しました。

(生き物)

2020/8/4 原作

2022/10/5 改作

さくらの置き土産



今からもう13年前のことです。

当時自分はうつ病からの病み上がりで、殆ど感情というものをなくしておりました。

奥さんと別れ、一人暮らしを始めて一年程立った12月の24日、さくらは奇妙なクリスマスプレゼントとして、元の奥さんの家からわが家にやってきました。

お金はかかるし、面倒を見るのも大変だし、余裕のある旦那さんに見てもらうのが筋よと友達に言われた奥さんは、自分に相談してきました。

いい加減言い争いには懲り懲りしていましたので、押しつけあいをするのも疎ましく、黙って引き受けることにしたのです。

しかし、その当時、さくらは既に癌にかかっておりました。そのことは知っていました。

さくらは、来た当初、本当に癌なの？と言うくらい元気で、会社に行く前の朝4時、丘陵地帯のかなり寒い空気の中の散歩も嬉々として楽しんでいました。人懐こいわんこで、通りを一緒に散歩していると、向うから人がやってくると、誰彼かまわず、路上にコロンと仰向きになって、お腹を見せ、搔いてよ、とばかりに無防備全開！宅配便のお兄さんが来れば、全く初対面なのに、とびかかってじゃれつく始末。本当に人懐こいわんこでした。

しかし、4月になると、さくらは、急速に弱っていきました。

散歩のスピードがおそくなりました。癌細胞が増殖しているらしくお腹が膨らんできました。そうして、ついには、玄関の上がり框（かまち）も一人で上がることが出来なくなったのです。

さくらは、動けなくなっていました。息が荒くなり、昼と言わず夜と言わず、苦しうに息をしています。こちら、そんな息を聞くと、夜も眠れず、ほとんど一晩中、さくらのお腹をさすってやる日が何日も続きました。辛いとも苦しいとも、一言も言わないさくら。その無言さが、痛みを訴える言葉よりも何層倍にもなってここに突き刺さりました。会社に行っていても気が気ではありません。

そうして6月24日の深夜、いつもは僕の手機で苦しい息をしながらうずくまっているのですが、突然よろよろ、このように歩きだして、扉の方に向かったとおもったら、僕のほうを振り向き、諦めたような悲しそうな眼をして

「おとうさん、お世話になりました。楽しかった。でも、今日でお別れです。さようなら」と言ったのです。はっきりと。

僕は慌てて、さくらを抱きしめ、タクシー会社に電話をして、かかりつけの動物病院に駆け込みました。

さくらは、早速酸素テントにいれられて、口には呼吸を助けるためのチューブが入れられました。

「しばらく様子を見ますから、一旦お帰りください」

と獣医さんに言われて、家に戻ってすぐ

「容体が変わりました」

と電話があり、返す踵（きびす）で病院に向かいました。

「もう、手がありません」

獣医さんはおっしゃいました。自分は、先生の言う前に

「安楽死させてやってください」

とお願いしました。

呼吸用のチューブが抜かれると、自力呼吸がもはやできなくなっているさくらは、間もなくこの世を去りました。

途端、それまでの感情を亡くしていた自分とは全くの別人に成り代わり、まるで堰を切ったかのように人目もはばからず大声をあげて泣き崩れました。

悲しくて、悲しくて、いとおしくて、かわいそうで。

家に連れて帰って、小さな棺に入れられたさくらの亡骸に目をやりました。

そうして、おもったのです。

さくらは、じぶんのいのちと引き換えにうつ病で感情をなくしていた自分に、感情を、ひとのこころを置いていった。

12月24日に来てから、丁度きっかり半年目の事でした。

それ以来自分は、身体がどんなに傷だらけになっても、人生がどんなにつぎはぎだらけであっても、そして、それらを取り換えることも消すこともできなくても、捨てるのだけは止めにしようと思うようになったのです。

さくらが命と引き換えに置いていってくれた「大切な置き土産」

だから、です。

2019/8/14

蝉（せみ）



今朝、自分の部屋の掃き掃除をしました。

掃き集めたごみの中に小さなニイニイゼミの亡骸（なきがら）がありました。

昨日の朝はなかったので、恐らくそれ以降、自分の部屋の中に迷い込んで出られなくなり、息、絶えたのでしょう。

それを見て、自分はとても悲しくなりました。

今の自分にたとえたのです。

蝉は、外界にでるまで、7年から13年土の中で過ごします。そののち、やっとのことで外界にでても、生きられるのは、せいぜい1週間から2週間。

そのわずかな期間も、自分の部屋で起こったような事故にあえば、さらに短くなる。

それを思うと、セミが哀れでした。

それを、今の自分に重ねました。

しかし、それではいけないと、

「そんな身の上ではあっても、少なくとも子孫を二人残したではないか。その子孫の内の一人がまたその先の子孫を二人、のこしている。自分の役目はそれで充分」

そう自分に言い聞かせようとして、更に物悲しくなりました。

そこまで遡って自分を納得させなければいけないほど、弱り切っている今の自分が、悲しくて、悲しくて、なりませんでした。

その後、自分はしばらく床の上で天井を見ていました。

そして、

「自分はその「感傷」にまみれたくない」

そう思いなおして起き上がると、その「空蟬（うつせみ）」をごみの中から拾い上げて「埃（ほこり）」を払い、それ以上まみれないよう戒め（いましめ）と供養を兼ねて机の上に置きました。

2020/7/?

蚊蜻蛉（かとんぼ）



家の中で寝っ転がって何気なく天井に目をやっていると、どこからか蚊蜻蛉（かとんぼ）がやってきて、見ているその天井に留まりました。

名前の「蚊」が示すように、手足がとても細長くていかにも「か細く、華奢」にみえました。

そういえば子供の頃、親父が

「蚊蜻蛉は天からの遣いやで。昔な、罪人として焚刑（ひあぶりの刑）にされそうになった若い男のところに、蚊蜻蛉が飛んできたんやが、その若い男はこういったん、そうな

「こんなところにおったらお前も焼け焦げになる。はよ、あっちへいね」ってな。ところがそれを聞いていた判官さんが、その焚刑を止めて、若い男を放してやったそうなんや。なんや、言うたら、な

「そんな気持ちの優しい男に悪事ができるはずがない。放してやり」ってな」

それ以来、自分は「虫も殺せぬ」男になりました。

今でも、自分はいろんな虫を見るたびに、いろんな感情が湧いてくることがよくあります。

多分それは、この、親父の話のせいでしょう。

2020/7/??

黒糸とんぼ



真っ黒な糸とんぼが、気象異常に見舞われた長雨続きの七月のある日、かなり激しい雨の中を一匹、飛んでいました。

とんぼからみた雨滴の大きさ、強さを人間である自分に置き換えてみると、ハンドボールのゴールシュートが雨あられと降る中を飛んでいるようなものだろうと推察できました。

それでも、黒い糸とんぼは何事も起きていないかのように易々と飛んでいました。

それを見て昔読んだ本の中の一節を思い出しました。

「韃靼海峡をてふてふ（蝶々）が一羽渡っていく」

何とも言えず、胸が熱い思いに満たされました。

2020/7/???

カナカナゼミ



コロナ禍、梅雨明け初日の朝、自転車でお店に向かうため、森林公園を抜けようとする中、突然、森の奥の方でカナカナゼミが鳴き出しました。

「かなかなかなあ」

カナカナゼミは別名「日暮し」と言って、夏の日が落ちるころに鳴く蝉です。

その鳴き声を聞いていると、日が陰って薄暗くなり、少しずつひんやりしてくるせいもあって「お祭りが終わった後」のようになんとなく物悲しい気分になるのですが、それをこれからお店が始まる「気分の上り坂」にしなくてはならない朝から聞くとは思ってもいなかったもので、少し憂鬱な気分になりました。

「なんで、選りによってやっと梅雨が明けた日の、しかも朝から、鳴いているんだ、縁起でもない」

そう思うと少し腹立たしくなってきたのですが、更にその「かなかなかなあ」という鳴き声を否応なしに耳にしていると

「ほんと、かな？ほんと、かな？本当にそれでいいの、かな？かなかなかなあ？」

と言っているような気がしてきました。

「あんた方、なんで私たちがこんな時間に鳴くようになってしまったのか、少しは考えてみたらどうですか？」

そういつて、何かの気づきを促しているような気も致しました

2020/1/29

蛾

「蝶（ちょう）」と「蛾（が）」

字面と発音からして「蛾」は何となく怖い感じです。

蝶々は飛んでいるのをよく見かけますが、蛾が飛んでいるのを見た事は一度もありません。

なので、蛾が飛んでいる処を見かけたら結構「ドッキン」とするかもしれません。

「見たなあ、俺が飛んでいるのを。消えてもらうしかないな」

そんなことを耳元で囁かれそうな気がするからです。

そうして何より「怖さ」が感じられるのは、歌舞伎の青隈を描いたような、メリハリの在り過ぎるどぎつい羽根の文様です。

蝶々は羽を立てて休みますが、蛾は羽を広げて休むので、あたかも「この毒々しい文様をとくと見ろ」とでも言っているかのようです。

その奸計の通りに引っかけ、自分は蛾を見るたびに、一瞬「ぞっ」として鳥肌が「もぞもぞ」と泡立ちます。

しかしその蛾ですが、蝶々は花から花へひらひらと舞って、その蜜を吸っているようなのですが、よく見かける蛾は、例えば玄関脇のモルタル塀に羽を広げてへばりついているばかりで、ピクリともしませんし、そんなものに一晩中へばりついていても、モルタル塀からは蜜も水分も口にすることが出来そうもないのに、なんで一晩中へばりついていいのか、という不思議な側面も持ち合わせております。

「おまえなあ、いったい何を考えとうねん？ あん？ 何が楽しいんや？ 何しにこの世に生まれてきたんや？ 言いたいこと、あんねえやったら、はよ、言うてみい」

それにしても、相手方の無言、無表情、無反応は本当に困ります。なので「当たり」を求めてつつい色んなことを矢継ぎ早に訊きたくなくなってしまいます。

それにしても何故、そんな蛾の事が、気が付くとしばしば頭の片隅に浮かび上がってくるのか、自分でもよく分かりませんが、妙に気にかかって仕方がない事だけは確かです。

蝶々の事は思い出しもしないのに、不思議です。何かが自分のアンテナに引っ掛かっているのでしょうか。

兎に角、何度も出てくるので、気になって仕方がありません。出てくるたびに文様が怖いので、憂鬱にもなります。

何かのシグナルであるならば、時を待たずに「暗号解説」に漕ぎ着けて、奥歯に残滓が挟まったままの様な鬱陶しさをできるだけ早く、取り除きたい思いに駆られております。

そんな折、不図

「天はこちらが望むような形で解をお示しにならぬ場合がある。敢えて形を変えて解をお示しになり、それに気づくかどうかお試しになる場合が時折ある」

大昔に読んだ本の一節を思い出し、形を変えた暗号を見落とすのも何だしなど、今少し前向きに観察を続けることに致しました。

正直に申し上げれば「自分はここまで気づく人間なのだぞ」と単に人々に誇りたいだけなのか、それとも真摯な気持ちからこうした取り組みをしようとしているのか、定かではなく、むしろ疑わしい部分もございます。また、先に記された「時折ある」の発生確率がどれほどの頻度で発生するのかも知る由も術ありません。

そういった点からすれば、曖昧模糊とした不明瞭さばかりが目立つのですが、従来の手垢にまみれた「人間様の尤もらしい言説」にはいい加減うんざりしてきているので、今般の危機に際し、新しい切り口を見出そうと、ここは敢えて全く手つかずの「辺境の地における八卦占い」のような方法をとってみようかなと思った次第でございます。

正に「当たるも八卦、当たらぬも八卦」の五分五分勝負。「勝った、負けた」は時の運。天が勝つか我（が）が勝つか？その勝負すらもお預け申す。

そんな都々逸のような語呂合わせを口の中で口ずさんでいるうちにだんだんその気になって参りました。

「鶴は千年、亀は万年。人は百年、蛾は一年。長短あれども今生一回。ならば後悔すべからず、あとは儘（まま）よ、と清水の、高舞台より荒波に、捨て石覚悟で飛び込まん」

（完）

（追記）

オマケの小説には必ず写真を載せておりましたが、今回は「蛾」の絵柄が怖いので割愛させていただきます。悪しからず。

(この星)

2021/11/9-2

奇妙な朝



墓地公園を抜けて帰宅する折に、石畳を打ち付けるほど盛んに降る雨の中で、豪勢な水量の噴水が立ち上っておりました。

「こんなに激しい雨が降って周りに水量は溢れているのに、なんで洪水の川に放水する様な噴水を止めないんだろう？」

その先を進んで、水抜きされた池の周りにぐるり巡らされた遊歩道を歩いていると、まだ子供で羽毛がぬけかわっていないのでしょうか、体全体が淡い灰色をした鷺（さぎ）が一羽、すくっ、とした姿で立っておりました。

仲間はいないし、白い羽毛の親鳥もいません。

足下の泥中の餌を捕るでもなく、歩くでもなく、ただ立っている。

「何が目的で身動き一つせず、この激しい雨の中で独り、只々ひたすら立っているの？」

その先をさらに進んで、墓地公園を抜け、畑に出ると今度は、いつもはそんなことをして居ない多くの鳩たちが畑の中にあるのでしょうか、餌になる何かを盛んにつついています。

「よりによって前方が霞む位のこの激しい雨のこんな日に、なんで？」

何かよくわからないことだらけの奇妙な朝でした。

今朝は物と人間以外の生き物たちでしたが、

「自分も端（はた）から見ると、こんな風に奇妙に映って居るのかもしれないぞ」

ふとそんな疑念がわきました。

やっている本人はそれなりの意図があって大真面目。しかしそこだけを周りから見ると意味不明な謎の行動。

いや謎の行動どころか「無駄かむしろ逆効果」な振る舞い。馬鹿げているようにしか見えない。

「自分の想いと人の評価というものは、いつもこんなものかもしれないぞ」

ヤギさんが相手に喜んでもらえると信じて疑わずに差し出している最高の餌である紙が、狩りを仕立ての新鮮な生肉が食べたいライオンさんには意味不明の申し出にしか映っていないような行き違いばかりなのかもしれない。

そう思うと、

ボタンの掛け違いが怖いような、独り合点による勘違いが恥ずかしいような、そのはき違いを犯さずにいられるのは、針の穴を射通す程難しい業である事が途方もないような。

お互いに異なる姿の相手を思い浮かべながら求める人を必死に探しているような様な位相違いの隔たり。

この先、もし位相が合ったとしても、その上で道が交わる地点に迄たどり着けるのかどうかさえわからない、

雨が霧状に飛び散る今朝の豪雨をさらに一段と濃くしたような視界不良。

その絵姿を眼前に想像すると、

どちらが沖合方向で、どちらが辿り着きたい、自分が目指す陸地方向なのかが見えない、一つ間違うと取り返しのつかない事になりかねない焦りと困惑からでしょうか、

何か言い知れぬ不安とそれを解消できなかった場合に生起するであろう事態への胸騒ぎに徐々に覆われていくのを止めることができませんでした。

2020/12/21

黒い予兆



朝、前日が日曜日だというのに、コロナ渦と気候変動由来とおぼしき突然の強大寒波で激減してしまった「悲しき売上」の整理を終え、自転車でお店から帰宅する途中、どこにいるかは分らなかったのですが、一羽のカラスが、やたらと大きな声で「カーカー」鳴くので、何事だろうと思いながら自転車を先に進めました。

朝日を浴び、反射で白っぽく光る道の真ん中に何か黒っぽい物が置いてあるのが見えました。

何だろうと、目をこらしながら自転車の速度を落としてその脇まで行ってみると、カラスでした。

お腹を天に向け、体の真ん中で両脚が縮こまっていました。

死骸でした。

そうだと分った瞬間、一瞬ドキッとしました。

カーカー大声で鳴いていたのは、それを悲しんでのことで、恐らく番い（つがい）だったのでしょう。

犬が死んだのを見たことはあります。飼っていた愛犬が亡くなったときに。

猫もあります。道路で車にひかれて「ぺしゃんこ」になったのを。

雀もありました。子供の頃、空から子雀が落ちてきたのを拾って、弟と二人で看病したのですが、翌朝には目が灰色になって死んでしまったのを。

しかしカラスは「生まれて初めて」でした。

獰猛且つ狡猾なカラス。

無意識にも「不死」だと思っていた、そのカラスが死んでいる。

しかも、密かに隠れることなく、生き物の死に方の作法に反し、おおっぴらに「人間の眼前」で。

そういったつかの間の慌ただしい比較対照算段がよぎった後、ある言葉が脳裏をよぎりました。

「異変」

尋常ただならぬ事態、の到来。

自転車の進行方向、照り輝く朝日の中にカラスの「真っ黒」

その残像が蘇ると、

未来に対して何か言いようのない不吉さを感じ、自転車を漕ぎながら、沖合彼方で急速に立ち上がり、あっという間に何もかも飲み込んでしまう津波のような「不安」に、気分ごと押し流されてしまい、しばらく自転車を漕ぐ先の景色が目に入っていませんでした。

それが、危ない運転だと気づいたのは、家にたどり着いてから後のことでした。

2022/9/19-5

木造大型客船「地球号」秘話



「例えば今我々が住んでいるこの惑星を木造の大型客船「地球号」だと思ってみて。木造と敢えて言っているのは地球がまさしく自然素材でできているからだ。大型客船と言っているのはそれ迄全く見ず知らずの人たちが「偶々、隣り合わせている空間」という意味で、船だから航海に出た以上他に逃げ場がないとイメージしてみてよ」

「何、又？外が大雨でお客さん来なくて暇だから、その時間潰し？」

「切っ掛けは何でもいいから、まあ、聴け」

「オヤジは明日店が休みだからいいけど、宮仕えの俺は仕事で、台風が来ても休めない。手短にお願い、ね」

「従業員は休みだが俺は休みじゃない、が、それはそれとして。例えば木造船の甲板で乗客が焚火したらどうなるか？ゴミが出たからと言って自分の客室を汚すのは嫌だ、それで自分ゴミをそこいら中に撒き散らしたらどうなるか？気に入らないからと船員や他の乗船客に向かって鉄砲を当り構わずブツ放したらどうなるか？無論船員も乗客も「ヤバイ」からと言って沖合遥か洋上を進む船から逃げ出す事はできない。で、その結果、どうなるか？直ぐにも想像がつくだろう？

だが、船側は船客の動揺を恐れて焚火の件もゴミの件も、鉄砲がぶっ放された件すら内緒にしたり、情報に手を加えダウンサイズして伝えたりする事に躍起になる。

が為に、お客さんは危険に晒されているにも拘らず案外呑気に毎日を過ごしている。

実は、是が今の地球の状態だ。かなり危うい。

一方この船上では、毎夜グランドホールでアトラクションやディナーパーティが開かれる。豪華な宴席でホールの周りには見栄えのいい観葉植物がおかれている。勿論それぞれのテーブルには花が飾られている。

乗船客は男も女もドレスアップしてホールに来る。来る前に自分のドレスアップ度が一番効果的なものかどうか、他の客室の様子をチェック（スパイ）する人も出てくる。他には客室やみんなが集まったホールの空調の効き具合どうのとか、出てきたステーキの焼き加減が今イチ自分のイメージしていたものと違うのとか、みんなそれぞれ勝手な事を言っていたりする。

要するに乗客の頭の中はそんな状態だ。

処が或日、焚き過ぎで温度が想定以上に上がったボイラーの熱が知らぬ間に船底にオゾンホールの如き穴をあけ、そこから浸水し始めた。

この船は可成り旧式で空調パワーを何とこのボイラーからとってたんだ。温度が上がった原因の一つに多くの乗客が「空調の効きが悪い」と同時にクレームを唱えた事も一因だった。さてこの船の運命や、如何に？果たして無事寄港出来るのか？」

「無理だね。原因は違うけどタイタニックの二の舞だ」

「そう。タラレバの話になるが乗客が空調の効きに対する文句を今少しトーンダウンしてタラ、或いは船側が事実実情実態を包み隠さずちゃんと伝えてレバそうはならなかったかも知れん」

「が、そうじゃなかった」

「それではマズかろう？」

(活きものコラボ)

2020/12/26 原作

2022/10/5 改作

冬のひまわり



夏のある日、お店に向かうのに公園墓地を抜けていくのですが、その公園に入る手前、左手遠方の工事に使う重機置き場の銀色のスティール塀の前に一瞬ですが何か黄色い帯のような物が目に入った気がして

「んっ、何？」

そして

「歳で黄斑変遷症が更に進んだか」

と憂鬱になりかけました。

しかし毎日自転車ばかり漕いでおりますと、年の割には存外動体視力が上がっていることにも気づいておりましたので、

「気のせいではないかもしれない」

と、これまた瞬時に思い直して、自転車を止め、彼方に目をやると、間違いなく鮮やかな黄色に染まった広がりが見えました。

「こんな処にそんなものあったっけ？」

と、自転車を左の道に切って近づいて見ると、それは辺り一面のひまわり畑でした。

自分には知識がないのでよく分かりませんでしたが、恐らく一夜にしてひまわり畑の花々が一気に開花したのでしょう。

「へえー、スゴイ！！良い物見つけた！！」

それからというもの、雨の日以外は少し寄り道をして、毎日ひまわり畑の様子を見ながらお店に向かいました。

お店の休日には、何時までにお店に行って事務処理を終えなくてはならない、という縛りもなかったのも、自転車を降りて、気ままに写真を何枚か撮ったりもしました。いろんな角度や思いついたいろんなテーマに沿って。

ところが夏も終わりかけたある日、あまり立ち枯れのひまわりが目立つわけでもなかったのに、ひまわり畑の脇を通ろうとすると、これまた一夜にして全部のひまわりが消えておりました。

「えっ、何？なんで？」

理由は分りませんが、恐らくこの土地の持ち主さんが一晩で全部のひまわりを刈り取ったとしか考えられませんでした。

一体、あれだけの本数を咲かせて、これまたあれだけの本数を刈り取った。

何のために？

そう言えば、時たま車で乗り付けてしばらく眺めていく人たちも何組かはおりましたが、その数は少なく、とてもその人数や訪問回数に合わせて植えられていたのだとも思えません。

ところがそれから数日後、刈り取られたひまわりのない裸の畑に鳩や名前の分らない鳥たちが朝から集まり、多分ひまわりを刈り取ったときに落ちた種だと思うのですが、畑のあちこちで気ぜわしく地面をつつく姿が見受けられました。

「鳥のためのひまわり？ひまわりの種作りの畑？」

益々このひまわり畑が何のために「豪勢なプレゼントでもあるかのような、あの盛大な偉容を誇っていた」のか分らなくなっていました。

更にそれから数ヶ月後、裸だった畑に緑が広がり始め、あっという間に成長していききました。

「今度は何が生えてくるのだろうか？」

何か謎めいていて、だんだんこの道を自転車で通り過ぎるのが面白くなってきました。

そして初冬にさしかかろうとしたある日、その畑は再び黄色く染まりました。又々一夜にして。

冬のひまわり畑だったのです。

「ひまわりって夏だけじゃないんだ。冬にも咲くんだ。そんな事ってあるんだ」

大変な驚きでした。

「あり得ないことがあり得る事も世の中にはあるんだ」

そう思うと、訳も分らず、なんだか、急にうれしくなっていました。

コロナで、冬で、風前の灯火の自分たち。

それでも「あり得ないことだってあるんだ」

というこの冬のひまわりは、いろんな物を示唆してくれる大切な宝物のように思われました。

自分は自転車を降りて、暫くの間佇み、その後、スマホでいろんな角度から冬のひまわり畑を数枚撮って、立ち去りました。

2022/8/14

生き物パーク



普通の野球帽だと首回りが熱いので戴いた麦わら帽子をかぶって庭の草刈りをしました。麦わら帽子は二、三日前、庭の草刈りをしていた時に来られた方が「それではあんまり暑かろう」と翌日自宅から持って来て下さったのです。確かに見た目は余りよくありませんが実用的で遮熱効果は抜群です。草刈りと言っても電動丸鋸回転草刈り機の鉄の刃を水平ではなく垂直に立てて作業を進めます。「草を刈る」というより「根切り」をする為です。草はすぐ伸びてくるので刈る頻度を減らすのが目的です。根切りをすると栄養が行き渡らないのでそう直ぐには生えてきません。「炎天下で毎日そんな作業をしないでも除草剤を使えば良かろうに」と助言して下さる方もいらっしゃいますが、それでは草花をボタン一つのハイテク兵器でオートマティックに「一子残さず根絶やし」にしてしまう様で、なんとなく気が引けて今一つ実施する気になりません。今年の夏はエアコンが壊れておりますので少しでも涼を得る為に窓や扉を昼夜分かたず開け放っておりますが、そのせいか屋外の様子を見る機会が増え内外（うちそと）の往来も随分と増えました。特に草を刈った後は、小さな生き物達が避難の為に建屋の方に逃れてきている様で目に留まりやすくなっているのかもしれません。

大カマキリ、セミ、ヤモリ、カミキリムシ、カナブン、スイッチョン、足長バチ、カトンボ、他にもいろいろ。

その様子から

「うちは生き物パークだな」

という気がして参りました。

大カマキリはセミを頭から体ごと喰らっております。

人間の自分から見ると如何にも残酷この上ないのですが、大カマキリにすれば食っていく為。セミは既に死んだ空蟬なので自身は痛くも痒くもない。

ですがその脇をヤモリがすり抜けようとするのをみると流石に

「お前を喰われるから逃げろ」

と声を掛けたくになります。大カマキリにしても空蟬よりは生ヤモリの方がご馳走でしょうから。

カミキリムシは何故か皿洗い用の流しの中でじっとしています。水が欲しかったのでしょうか。

カナブンは書机脇の書類入れの金網部分にへばりついています。深夜仕事なので多分蛍光灯の明かりに惹かされたのでしょう。

スイッチョンは子供の頃に見て以来 60 年ぶり位に見ました。結構いっぱいいます。

足長バチは何故かよく自分の眼鏡の左のレンズに止まります。

つるつるのレンズ表面の何処に足を引っ掛けているのでしょうか。

カトンボは朝起きると鼻の上に止まっていたりします。

寝ている間によく押し潰さなかったものだとしひやひやになります。

気のせいかどの生き物も言葉が通じるみたいです。

話しかけると逃げません。

昨今

「この世は人間だけでは、ないのだなあ」

とつくづく感じております。

非常に「感慨深い意味深な」何かに行き当たった様な気が致しております。

2022/8/25-2

真夜中の秘密会議



「あれっ、なんでこねえいな処にお袋のハンドバッグが落ちとんにいやろう？」

探し物があって以前両親が寝室として使っていた部屋に入って直ぐの処に皮のハンドバッグがあるのに気づきました。

このバッグは2年ほど前、お店の資金繰りに窮して古物商へ査定に出したのですが、昨今は動物愛護の観点からワニ、蛇、ダチョウ等嘗ては高価で取引されていたものでも買い手が激減しているとかで二束三文の値段しか付きませんでした。

それで仕方なく売のを止めてクローゼットの中に戻しておいた心算だったのですが何故かそれがクローゼットの前に落ちておりました。

確かにクローゼットの扉は空気の入れ替えの為に開けっ放しにしておいた記憶はあったのですがバッグ一つを仕舞忘れた覚えはありませんでした。

「妙な事があるものやなあ」

この家は両親が亡くなって以降自分が遺言に従って引き継いだのですが、一人で住むには矢鱈だっ広く陰影部分もかなりあるせいか時折「ポルターガイスト（超常現象の譬え）」みたいな事がしばしば起こっておりました。

風も吹いていないのに扉がガタガタ鳴ったり誰もいない筈の二階をかなり体重のある人間が歩いている様に床がミシミシ軋んだりしていたのです。

それでこのバッグの一件も「例の奴やろう」とあっさりケリをつけ、階下に降りました。

「ダメだったじゃないのよ」

とクローゼットの中でお袋が使っていた古いカーディガンが言いました。

「気づきはしたけどその先、昨晚の打ち合わせで描いた筋書き通りにはいかなかったな」と今度はオヤジが使っていた古カバンが答えました。

実は昨夜このクローゼットの中で両親が生前に使い今ではその肥やしになっている古物達が秘密の会議を開いていたのです。

議題はズバリ

「私たちを使って!!」

主旨はと申しますと

「人間様は自分が使わなくなると人にあげたりもせず、ただ単に仕舞っておいたり捨てたりする。確かにその人の中では私たちは「もう終わっている」のかもしれないけど私達からすると「まだ全然終わってなくて」これからも引き続きお役に立てるしもっと活躍もしたい。なのにその場が与えられないままこの世から消されるのは如何にも残念でならない。この不完全燃焼から一刻も早く脱して再びのびのびと活躍できる良い方策はないものか？」

でした。

その折、古カバンが提案したのが

「ハンドバッグ、お前が一番目立つからちょっとご主人様の目に留まり易い処に転がり出してみろよ。まずは第一回目として」

で、それがものの見事に外れバッグが文句を言ったのが先程の件だったのです。

「なあに、ダメだったらやり直せばいい。何度でもやり直せばいい。兎に角やれる限りの事をやってみよう。諦めるのはその後だ。なあ、みんな」

相談の結果、次はこの屋の主が好きそうな破れ「長財布」が転がり出る事で話が決まりました。

「直して使ってくれるかもしれんからな、今のご主人自身が」

(ミ ッ シ ョ ン)

2020/5/2

Final mission 「最期の任務」



これはとても感傷的なお話です。

しかし、百年に一度の疫病禍の時節には、そうなるのも仕方ない気も致します。

以前、お店に向かう途中、1メートル進むのに1分以上もかかる老犬を連れた、体格がよく顔には品格を感じるご老人とよくすれ違い、挨拶をするようになりました。

「旦那さん、いつも大変ですね」

「いやいや、自分よりこいつの方が」

そんな会話です。

しかし、ここ2か月ほど、その姿を見かけなくなりました。

こちらもいろいろありましたので「そういえば、なんとなく見ないな」くらいで済ませていました。ほとんど忘れていたと言ってもいいでしょう。

それが、今日突然、

「わんこは連れていないが、あのご老人かな？」

という人とすれ違ったので、他の人同様ウィルスを防ぐためのマスクをしていたせいもあって「間違いかもしれないな」とは思いつつ、声を掛けました。

「いつも、わんこを連れていらっしゃる方ではありませんか？」

するとそのご老人は、足を止めてマスクを外しながら

「はい。そうです」

とおっしゃったので

「わんちゃんは、今日はいないんですか？」

と尋ねると

「亡くなりました。1月に」

とにこやかながら寂しそうな顔でおっしゃいました。

「そうですか。かわいそうに。旦那さんは元気でいてくださいね。お力をお落としでしょう

けど」

ご老人は薄い笑いを浮かべました。

「ありがとう」

しかしそのマスクを外した顔は、下半分が白い無精ひげで覆われていて、その力の落としやうがはっきり表れていました。いつもはきちんと髭を剃っておられたからです。

自分は、実はすれ違うたびに、あのわんことの散歩がこのご老人の生きが이었다ような気がしていました。というより最後の任務。Last mission。

「わしがいなくなれば、誰がこいつを散歩させるんだ」

その任務は終わってしまいました。

わんこより元気なご老人にとって、あの 1 メートルを歩くのに 1 分もかかるわんこは、反対にご老人の「心のステッキ」だったのかもしれないな、と思いました。

会話をした後、次第にお互いの距離が遠ざかるにしたがって、何故か、悲しくて、悲しくて仕方なくなりました。

それぞれの行き先が反対方向だったので、お互いの、その後の顔を見ずに済んだのは、幾分なりとも、幸이었다ような気がいたします。

(完)

結

星に願いを

生き物とまだ使えるもの達と人間がそれぞれの特性を活かしあって、この星の上で末永きに渡り、コラボしながら仲良く暮らしていけますように。

From old man with Mission impossible

Thank you

(著者プロフィール)

うときゅう いっき

本名 宇都宮一貴 (うつのみや かずたか)

一九五三年東京生まれ。

早稲田大学第一文学部露文学科を二回留年の後、卒業。

国内電機メーカー家電製品商品企画部に二十年間勤務。同子会社経理部等に十六年間勤務。

四十歳から五十二歳まで十二年間うつ病を罹患。

左遷、リストラ、降格、離婚、家族崩壊等を経験。

定年後、株式会社うとQを設立。

現在主業はネパールカーリー屋。

趣味は観察すること、考えること、書くこと、盗撮はしないスマホ・カメラの四つのk。

著者名は苗字、宇都宮一貴の音読みで、中学校時代の仇名。

宇宙の「う」

東京都の「と」

宮殿の「きゅう」

数字の「いち」を詰まり音便で「いっ」

貴族の「き」

で、うときゅういっき となります。

漢字表記にしますと、かなり御大層な人物に見え、実態に全くそぐっておりませんので、誤解を招かぬよう音読みひらがなで表記しております。

ホームページ：<http://utokyu.co.jp>

(出版情報)

著 者 うときゅういっき

発行人 宇都宮一貴

発行所：株式会社うとQナマステ別館堂出版部

〒二一五 - 〇〇一八

神奈川県川崎市麻生区王禅寺東5丁目34番7号

電話：〇四四 - 九八九 - 一六九八

発 売 株式会社 うとQナマステ別館堂出版部

編 輯 しばらくの期間「ナマステ別館堂出版部」

カバーデザイン&DTP 製作 当面の間「ナマステ別館堂出版部」及び「ナレッジフォレスト 大竹鉄哉」

©Kazutaka Utsunomiya uploaded in japan 2020

発行日：二〇二二年十月七日 初版発行

本書の一部または全部について、著作権上、著作権者の承認を得ずに、無断で複写、複製することは禁じられています。

(その他著書)

●多数

●尚、掲載写真は全て google 画像サイトの著作権フリーのものをダウンロードして使用しております。当社には著作権、版權は全くない事を明記させて戴きます。